

三河アララギ

平成三十年 2018年

十一月号

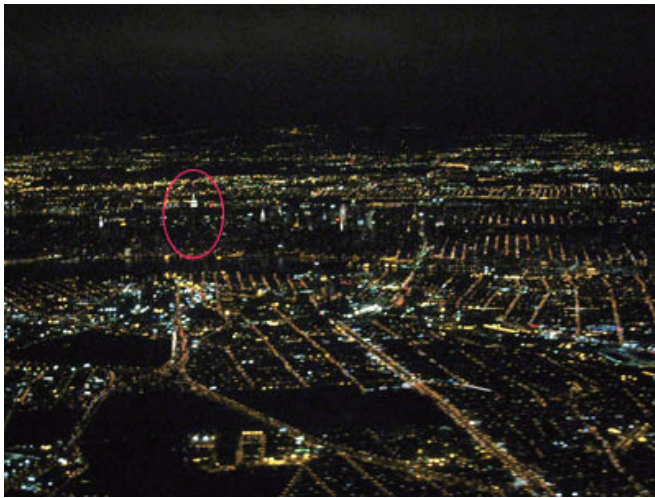
第六十五卷 第十一号



ニューヨーク日記(145) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Blue Shoe Diaries



珍しくマンハッタンの夜景が見えるルートで帰ってきました！（JFKに着く時は通らないの。あと何故か昼間が多いのよね）TVに夢中になっていて見失う所だったよ。もうちょっと早く気が付けばもう少しいい写真になったのに。。。ちょっと分かりづらいからエンパイアーステートビル丸しといたね。

Look, night view of Manhattan from the plane! I don't get to see this very often bec we tend to fly back during the day or to JFK. I almost missed it bec I was hooked on the TV. Love JetBlue's TV but hate it when you arrive before the show you're watching is over.

目次

第六十五卷第十一号(通卷七七九号)

表紙・曼珠沙華 今泉 由利 (1)

ニューヨーク日記(145) Blue Stone (2)

黄素馨の門 御津 磯夫 (4)

三河アララギ歌集VII 大須賀寿恵 (5)

歌集「續草々」 今泉 米子 (6)

三河アララギ歌集VII 河原 静誠 (7)

初秋の朝 岡本八千代 (8)

面影 弓谷 久子 (10)

地球的 今泉 由利 (12)

この道を 安藤 和代 (13)

もう手に抱き 清澤 範子 (14)

またもまたも 伊藤 忠男 (15)

行在所跡 白井 信昭 (16)

ぶらぶらと 森岡 陽子 (17)

農の短歌 山口千恵子 (18)

日記帳 杉浦恵美子 (19)

着陸成功 阿部 淑子 (20)

時は止まらず 夏目 勝弘 (21)

『いーはこせ』 いーはこせ (22)

森 厚子 (22)

吉見 幸子 (22)

牧原 正枝 (22)

石田 文子 (22)

森 厚子 (22)

山崎 俊子 (22)

三田美奈子 (23)

水野 絹子 (23)

牧原 規恵 (23)

稲吉 友江 (23)

鈴木美耶子 (23)

現代学生百人一首 東洋大学

河邊 仁紀 (24)

辻里 咲子 (24)

篠塚 真穂 (24)

川上 悠太 (24)

山崎 凛 (25)

鎌田 輝希 (25)

菊地 愛佳 (25)

天保菜々子 (25)

森岡 陽子 (26)

高橋 育郎 (28)

重野 善恵 (30)

今泉 由利 (30)

柳田 皓一 (30)

山迫 京子 (31)

山元 正規 (31)

森岡 陽子 (31)

松本 周二 (31)

植村 公女 (32)

今泉 如雲 (32)

杉浦 弘 (32)

田中 清秀 (34)

丸山酔宵子 (36)

江上 浩二 (38)

山本紀久雄 (40)

今泉 雅勝 (42)

平井 茂行 (44)

中屋 保之 (46)

津之地直一 (48)

萬葉秀歌の鑑賞 津之地直一 (48)

『歴代天皇御製歌』(九十四) 眞名海屋資料館 (50)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 本田 勇氣 (54)

御津磯夫短歌鑑賞 鮫島 満 (56)

「水魚」のことから(214) 岡本八千代 (57)

編集室だより(二〇一八年九月) 今泉 由利 (58)

野菜・まんだら(9) (59)

「三河アララギ」について (60)

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

みささぎのみ前の沙をぬきいでておそき蕨のみどりみじかし

ひむがしの田原の杜のおどろの中たけてやさしき紅うまごやしの花

草とともに刈りそけられしあと萌えてふたたびきほふむらさきつゆくさ

泊瀬の水いまに稲田をはぐくみて千年のみのりかをりたつ中

歩む足も時もなければ田をこえて立つ道標もよまずすぎゆく

三輪山を雲のかくさずわがために秋の日暑きかすみのおぼろ

信ならず史ふみにもよらずのぼる山秋の鳥さへなかなぬ神の山

山は神巖は神とひれ伏してかしくみ申すうしろをとほる

うまさけの三輪の神山しげりあひて日の経緯たてよこを見さくるは無し

みわ山は男神なり秋にさく花まれまれにをとこへし白し

三河アララギ歌集Ⅶ

大須賀寿恵

水運び来たれる如雨露に入れて帰るけさ収穫の曲れる胡瓜

樋つたふ雨だれの音は一分ばかりひでり続きの雨通りすぐ

竹の杖つきて護岸の階くだるわれに鴨らの翔び立ちにけり

よたよたと川敷歩みてかいつぶりの六羽は次々に流れに入りゆく

ゆゑのなき涙湧きくる朝なり炎をあげて紙屑を燃す

松葉画廊に友の花の画を観にゆかむ幾年振りに草履をはきて

わが足の萎えは今更いまさらにして足指をわけ皮草履はく

暑かりし一日暮れつつ誰もぬ居間にも蚊遣りの煙ながるる

梅雨空をま白く千切れ雲ひとつ静かに流れ融けてゆきたり

犬槿の花散り終りあたらしき緑の細葉小僧見えそむ

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

雨のふる中にて庭に昨日よりとびめぐりゐる黄の蝶一つ

さらさらに忘れ過ぎつつ笹萱よりあらはれいづるキツネノカミソリ

笹竹の一葉一葉のことごとく照り返すなり今朝の光を

独りわがたのしむものかまなかひの今年の竹はわが風見笹

夕風ぎに立ちたるままの笹竹の見えずなりゆく一日終りぬ

まなかひに大明竹の立ち立ちてたゆきこの日も午後三時なり

昏むまで窓にからめるカラス瓜生りしことなし絶ゆることなし

おくれたる曼珠沙華の花よよぼと嵐のあとをしばらく保つ

十葉も金線草みずひきも蓼たでもありのままほしいままにて夏過ぎにけり

草取りて現はれしまた全けき飛石を伝ひ歩きて行きもどりする

三河アララギ歌集Ⅶ

河原静誠

園児等に産湯の甘茶を注がしむ青竹の小さき柄杓に汲みて

竹林の騒ぐ細道登り来て宗学の講習にわれも加はる

姉弟子と往生の事論づる夢より覚む夜香木甘く匂ふ小床に

園児等が三抱へにする老櫨はうつろとなりてなほ茂り立つ

さらさらと音をたてつつ老櫨の春の落葉は境内を舞ふ

木の芽雨吾が老櫨にそそぎをり日毎におとろふ吾老櫨に

衰へたる吾が境内の老櫨にけふより焼杉の太き支柱を

園児等の競ひて飛ばしたる紙飛行機の一つが境内の櫨の木の枝

沙羅双樹の花は真白く落ち敷きぬ春の椿に似たる其の花

初秋はつあきの朝

蒲郡 岡本八千代

晴天は二日つづきてまた雨のしよぼしよぼ降りをり初秋の朝

今朝もまたパジャマの上にエプロンかけ朝食あさげの支度よわが化学室に

しくしくとも思ひつつ朝めしを食べてをりけりきのふと同じく

ぼつぼつと雨だれ落つる軒の下通りて今朝もわが籠り部屋に

札幌の震度六強に思ひ出す札幌の友白水しろずかん涵子さんを

学校の帰りの道は君とわれ同じき方向の下宿への道

白水さん「罪あらばそを忘れたといふことさへも忘れよ」とわれに

「この道よりわれを生かす道なし」の實篤の色紙玄関に飾る

山三つの下には白き道ひとすぢ描きてありたり武者小路の色紙

独り思ふ「この道」とは何ぞやとけさの朝あしたのわれの幸福

「この道」は人それぞれに異ならむとも思ひつつ聞く雨の音

けふもまた閑ひまさへあれば本を読む本読むことが仕事となりしか

かたはらに蚊取線香のうす煙りたゞよふ中に独りの夕食

つつましく二人の如く家中に遺影の君と生活くちすわれかな

つつしみて独りの今を過すごしつつ今宵読む本またも「赤光」

面影

豊川 弓谷 久子

七月六日くれし電話が志げさんの最後の声となりてしまひぬ

再びの電話ひたすら待ちゐたり亡くなりたりとは露知らぬ身は

前向きの明るいあなたが好きでした又一人減る歌の仲間が

台風に続いて今朝は大地震天変地異か明日は我が身か

はやばやと誕生日祝い貰いたり生き抜き来りしさまさまの世を

楽しかった思い出拾いて生きゆかむ九十一の今日誕生日

さつま芋一畝掘りてくれたりき野良着の父が誕生日にと

真夏より秋半ばまで一日で変わる今日の気候にうろたえてをり

頼まれて雑巾縫いたり五十枚ミシンの音は今日も快調

みのり田の黄金色の穂を眺めたり父と母との面影追ひて

庭隅に彼岸花四本ひっそりと咲き出してをり彼岸入りの日

桔梗咲き終日咲きと珍らしき朝顔の花今朝も眺むる

最前列に小さく我が座りをり敬老会の記念写真届く

中秋の名月中天に浮かびをり少し赤くて少しうるんで

穂芒も団子も無けれど中秋の名月眺めて満ち足りる夜

地球的

東京 今泉 由利

地球的電波の乱れと伝ひ来し戸惑ふ戸惑ふひとりの部屋に

誘導はニューヨークより届きつつ日本のパソコン直さむとする

目に見えぬ程の小雨に濡れてゐる駅までの道権現の坂

一彫りを一彫り毎を重ねつつまだまだ続く一彫り一彫り

とつとつと私の心をお伝へす檜角材釈迦如来像

育種学実験棟の檻の間を歩いてまみえき近藤典生博士

「変なもの好きですね」手渡し下さるセイシユル島の双子椰子の実

マダガスカル原産アカネ科18葉このコーヒー木と同棲中

地上より一万メートル飛行中小窓の隔つ外気を知らず

地球なる夜景の中にひとつある私の家のあかりを探す

この道を

豊川 安藤 和代

台風になじれ振じれてゴーヤ蔓先に小さき花をつけたり
庭になく鈴虫の声聞こえつつ遠住む孫等思いて眠る
本宮は雲におおわれそのむこう友住む町を案じ見つむる
交差点見守り隊に見守られ最後のひとりがかけ足で過ぐ
ゆく雲は流れながれてどこへ行く眠るが如夫は逝きたり
起きそうな夫の顔をばいく度も冷たさのみが手に残りいる
ふと夢かと幾度となく確むる遺影は部屋にほほえみてあり
病いゆえ禁じられぬし好物を遺影に供え涙ポロポロ
昨年夫と歩みしこの道をひとり歩めば月昇り初む
猛暑にも負けずに咲きて夏すみれ残り三花に秋風やさし

もろ手に抱き

春日井 清澤 範子

腰痛をかばひつつあり吾が夫は里芋ジャガ芋植えて楽しむ

夫目覚めまず裏庭に出て菜園の里芋茗荷に朝の挨拶

里芋の堀り残しある菜園に葉茎大きく露持ち光る

町内会より敬老の祝ひとて紅白のまんじゅう戴く夫と揃ひて

直送のモロヘイヤは葉の大きくてその柔らかきを酢味噌に合える

夫の耳遠くなりたり吾はまた近くに寄りて声を大きく

筆談をする時もあり小声にて早く気持ちを伝えたい時

立秋を前にして厨に立ちをりて耳を澄ませば蟋蟀こつるぎの声

父母想ひ今日はなぜか泣けて来る鏡に向ひて笑顔してみる

足腰の具合悪しき吾の身を娘はもろ手に抱き添えくるる

またもまた

大阪 伊藤忠男

自画自賛聞きあきたれど由々しきや虚言暴言秩序乱るる

孫よりの手作りクッキーお返しに焼肉痛し敬老の日は

コオロギの鳴く声涼し笹木立薄れる夏に心傷むや

海鳴りの聞こえる街か淡路島漁火かえす碧き海原

今地震あればどこと逃げ場無し古きトンネル危うきことに

恐れなす地震カミナリ火事親父今年加えて酷暑に嵐

海に山盆地に平野どことても野分吹き荒れ木々横倒し

タイフーンサイクロンならハリケーン所変われば呼び方変わる

風の音響く雨戸を叩く音いやが上にも不安募らす

東から南に変わり南西に台風多分北に抜けたか

行在所跡 あんざいしよあと

豊川 白井 信昭

引馬野の空渡る陽の農道に陽炎たつなか行在所跡へ

いついくつ川堤きてここ宮浦は持統上皇の御所宮伝承地

伝承地明治六年御所宮は佐脇神社に鎮座まします

音羽川改修工事に伴いて行宮は解体石碑は公園に

老松の太き伐り株ひとつあり御馬公民館昔を偲ぶ むかし

小公園持統帝碑の傍らに三河アラギの五十周年碑

上皇の三河行幸を詠みし一首御津磯夫の歌正面に読める

小公園持統帝碑と創立碑年を刻める未来永劫 えいごう

ももえなす行在所跡の木槿花大方は白く紫もあり

簾がけ二階の網戸開きある明け方すずし風ふきぬける

ぶらぶらと

東京 森岡陽子

女学生クレープ食べ食べお喋りは独自の言葉我に通じず

いつの間に季節移るか虫の音は暑さ残るも今宵聞ゆる

秋夕焼楽しむ間もなく消へ行くは突然あせる急ぎ帰路急ぐ

秋曇気分沈むも美術館へ江戸の華やぎ屏風から感ず

ぶらぶらと学生時代楽しんだ渋谷変るや思い出消へ行く

蝉の声子供等の声消へた今森の公園広く広く見ゆ

鉢植のオリーブの実青々とまだまだ小粒夕風にゆるる

ふかし芋バターをつけておやつにす九十越へのババ友とのいつ時

友の家の玄関横に紅芙蓉友のルージュは紅芙蓉の色

秋の雨静かに静かに降り続く一羽のカラス雨の中で鳴く

農の短歌

豊川 山口千恵子

誕生日を祝ひくれたるは農協の年金友の会の人のみ

夕方より開き始めし月下美人ふくらみゆく蒼見つめてをりぬ

香りつつ月下美人の花開く強き香りは玄関先より

開ききりし月下美人の白き花いつまで保つやもう寝にゆかむ

咲きほこりし月下美人は凋みたりたつた一夜の真白き花

わが母と同じ名前の志げさんの詠まれし農の短歌の数々

葛の花咲きゐるかなと仰ぎみる散りたる花びら紅の色

彼岸花咲ける排水溝の土手の草刈り取りてゆく彼岸花残しつつ

敬老会の招待の手紙もらひたりはや何回目と数へてみたり

赤と白と黄の彼岸花咲きにけり一ときわが庭はなやぎて見ゆ

日記帳

蒲郡 杉浦恵美子

覚えてるよりも忘れたこと多し我が青春の日記帳の嵩

よくもまあ観念ばかり書き続く青き年頃あおき日記よ

何をした何処に行ったか知りたくも空想ばかりの我が青春日記

若き日の日記の筆跡母に似て細く小さく時々崩し字

膨大な過去は過去として今は我何処かに線引きしたい気がする

抱えれば持ち重りする日記帳捨ててしまおう身軽になりたい

世に出るは才能のみにてゆかぬらし生涯不遇の一村展観る

才能を愛する人に支へられ画業ひとすじ田中一村

またひとりゆつくり裏道通る人居なくなるのか我が集落に

微笑みてすれ違ふだけ明日からはもうそれがないおばあちゃん逝く

着陸成功

豊川 阿部 淑子

百壽者は年々増えて本年は七万近いと寿ことほぎの記事

日本一百十五歳の田中さんゲーム計算五年先も夢見つ

はやぶさ2を離れしロボットリユウグウに移動探査で着陸成功

天災や人災の続く日々気ぜわしく気づけば歌稿のしめ切り近く

ふり向きて「またあした会おうね」と別れ行く児童の声耳に残りて

時は止まらず

豊川 夏目 勝弘

たびたびの台風に揉まれしネムノキに白色目だつ返り花あまた

海水温高かきが台風の多き理由ほかにも何かの理由あるらん

科学にてわからぬことの多くあり宇宙は無限知らぬことも無限

心にも宇宙の広がりありという我が心のその果しらず

軒下の空缶を打つ雨垂れのリズムが早くなりてゐにけり

真剣に見るテレビは天気予報庭師の仕事の予定がたたぬ

天気図と衛星写真とを読めずとも見つめてゐれば自づと感ず

雨と晴れが一日おきに来るがよい庭師を一日休みを一日

四十年を手入してこし黒松のミドリ伸びの今年は悪し

空カンに一つリズムにて雨垂れの打ちゐる音が闇に消えゆく

濃淡のなき一色ひといろの梅雨空に飛び翻るツバメをみたし

雨を含む黒き雲が生き物のごとく南より低く迫りくる

雨足の目には見えねど庭石の濡れてきたりぬ本を閉じたり

新聞のテレビ欄のページを広くさて早目の昼飯にせむ

未だまだ山に帰らずひたすらに恋呼びつづく松原のウグイス

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

孟蘭盆会うから集ひて十五人嬰兒の笑顔皆のほほえみ

熱き夏アスリートたちの逞しき記録ぬりかえる心技体を見る

吉見幸子

この春の新芽いつきに反り返る蘇鉄がわがわ日差しがきつい

毎年の平和宣言のこの朝よテレビに映る川岸に人よ

牧原正枝

台風の過ぎて西へと雲早し突然鳴き出すつくつくぼうし

便箋に金魚の涼しく泳ぐ絵あり嫁の便りにしばしの和み

石田文子

夏すぎて風吹きぬけるベランダに本よむ吾にここちよきかな

誘はれて初体験の「コストコ」にて吾子とシェアするあれもこれも

森厚子

ハスの花薄紅色に淡淡し処暑にふく風すがすがしくも

十葉のさし絵の歌集いくたびとくりかへし読むああ伊那のなつかし

山崎俊子

今朝咲きしオクラの花もはや萎みてらてら暑きけふの夕暮
おのづから心平になりにつけり開門早々の増上寺に参りて

三田美奈子

明けぬ夜は無しと思へどこの嵐灯りも無くば如何にか過ごさむ
裸富士雲を纏ひて照れくさげ青き高嶺も今朝は身近に

水野絹子

名鉄の赤き電車に忘れたるわれの日傘よまたわが元に
嵐過ぎダメージ受けしわが畑のナスは生き生き再びの花

牧原規恵

寂しげに「畑はもうやめる」と言ひし母の背中のはほも小さく
声弾む園児ら乗せてバスは行く朝の光の差し来るこの道

稲吉友江

朝刊の「吸つた空気が熱い」など読みある私早も汗汗

角凹みターンテーブルを出でて来しリスボンよりのああわがキャリアー
鈴木美耶子

現代学生百人一首

東洋大学

手強いぞ言ったら引かぬ更年期言われて聞かぬ私思春期

芝浦工業大学柏高等学校一年（千葉県）

河邊仁紀

身長をやたら気にする君だけどおんなじ目線が私は嬉しい

千葉商科大学付属高等学校二年（千葉県）

辻里咲子

お見舞いの我が子にみせるその笑顔いつか看護の私に向けて

香取郡市医師会附属佐原看護学校一年（千葉県）

篠塚真穂

十五才記録ぬりかえ一番にどこまで伸びる将棋の力

国分寺市立第五中学校三年（東京都）

川上悠太

日本初桐生祥秀九秒台さらに活躍高まる期待

国分寺市立第五中学校三年（東京都）

山崎

凛^{りん}

大陸をコンテナのつてやつてくるすさまじいかなヒアリの恐怖

国士館中学三年（東京都）

鎌^{かま}田^た

輝^{てる}希^き

少しだけ働く祖父に近づいた十五の夏の腕時計の跡

女子学院中学校三年（東京都）

菊^{きく}地^ち

愛^{あい}佳^か

軽やかに長細い脚をくり出して駆け抜けていく運ぶ鹿

大田区立東調布中学校三年（東京都）

天^{あま}保^{やす}菜^な々^な子^こ

贈呈誌

森岡陽子

葛布の襖

- 能舞ひの軸揚げたる床の間にひつそりと赤き万年青おもとのつぶら実
○寒の入りに寒の水にて寒糊を作りし事も遙かになりぬ
○いかるがの王子の衣の黄丹おうだんの色のでやかな薫りをしのぶ

新藤綾子

帰結

- 軒を打つ雨音次第にリズム持ち古りしピアノはシヨパンをかなず
○掌にすくう洗面の水なめらかに秋は生まれつ彼岸のあした
○半分に割りし焼き芋ふうふうとじいさんの手に持たすばあさん

加藤邦子

青森アララギ 第四百六号

- 晴れた日の東風やませに揺るる庭もみぢ部屋では感じぬ風の冷たさ
○昏れそめし川面にうつる家並は夕日を受けてみな茜色

藤田礼造

相馬富美子

鹿児島アララギ 9月号

○関はらぬと見ぬ振りしゐるに愛らしく蝶を追ひかけジャンプする子猫 奥悠子
○被災地に人が住むらしあばら家に夕暮れ迫れば煙り立つ見ゆ 千葉源治

柊 九月号

○釣太鼓の稽古か朝の社より同じところで音の止まれる 石動玲子
○山頂に林なす樵の芽吹き遠く白山の峰雲のごと浮く 桑原一枝

冬雷 10月号

○秒針の音の聞こえる昼下がりに裏の杉山そよぎもあらず 天野克彦
○音の無き一人の昼を針運びつつ遠き日吾の浴衣は麻の葉 山崎英子
○段をなす砂紋の幅のふくらみを潜りて突けば鯉の逃げる 高田光

栗よ はじける

高橋育郎 作詞

ぼくらはそろって 元気な栗だ

春に生まれて 育っていくよ

夏をのりこえ 実りの秋は

ぼくらの季節に なったんだ

力いっぱい さあ はじけよう

季節はめぐって また春がきた

青いいがいが 栗の子いたぞ

夢がつまって　むかえる秋は

ぼくらがふくらみ　はじけるときだ

喜びいっぱい　さあ　はじけるぞ

甘栗　かち栗　焼き栗だ

みんなうまいぞ　うれしいな

とりいれの秋だ　お祭りだ

幸せいっぱい　はじけよう

お祭りワッショイ　それ　はじけよう

『俳句』

母の忌や唐もろこしも膳にのせ

重野善恵

竜胆や牧の牛乳搾りたて

崖下り墓への道や真葛原

撫子やひとりぼっちになりにつけり

今泉由利

空澄めり考える人何思ふ

色あせて枯れゆくことよ曼珠沙華

牧水の書飾る宿花芒

柳田皓一

秋雨やカバンに傘をしのばせる

足のばし秋の七草摘みにゆく

望月をベランダでみる共白髪

山迫京子

銀色の芒の穂波風渡る

樋を巻く蔓に朝顔咲にけり

天平の色を伝へて藤袴

山元正規

道ありて道なきごとし芒原

葛の花枝垂れて塞ぐ風の道

地に触れてなほ花開く白き萩

森岡陽子

格子戸の奥は賑ふ新酒会

銀杏の散り敷く庭の美術館

一湾を黄金に統べ望の月

松本周二

名月や雲の形を金色に

水揚げの秋刀魚や波止の群れ鴟

図書館の本の匂ひや秋暑し

植村公女

二年後のボランティア募集鯛雲

安産のお守受けし秋日和

露天湯に津軽ことばや藤袴

今泉如雲

秋蝶や四代藩主は名君と

B4のスケッチブック薄紅葉

花野来て千年杉を仰ぎけり

杉浦

弘

たどりつくお助け小屋の稗の飯

峠越ゆ飛驒も信濃も秋深き

一椀に納まる膳や紅葉狩

まだ爆ぜぬ藤の実金の産毛もつ

おのがうたおのれよしとす花臭木

穂孕みて色づく木曾の棚田かな

気のつけば盗人萩のズボン穿く

神は山に座す大台の薄紅葉

もてなしに薄塩味の零余子かな

かさね吟行会

「目黒自然教育園」 九月

田中清秀

都心にありながら豊かな自然の面影を残す数少ない公園、港区目白台にある自然教育園を吟行した。平成三十年九月十四日小雨まじりの曇り空の下、教育園の入口に十一時に集合する。早速に園内の散策に入る、ここは四から五百年前の中世の豪族の館に始まり、江戸時代は高松藩松平家の下屋敷、明治時代には陸海軍の火薬庫、大正時代は宮内庁の白金御料地という歴史がある。一般人が入ることが少なかった為に都会の中のオアシスとも言える貴重な森林緑地として残っている。昭和二十四年に全域が天然記念物および史跡に指定され、その後昭和三十七年に国立科学博物館付属自然教育園として一般に公開された。他の植物園と違い自然の移りゆくままをできうる限り本来の姿に近い状態で残そうという独自の考え方のもと運営され、その為に常時三百人の入園定員を設けリボン渡して数えているとのことであった。

街の音遠くしてゐる虫の声

雑木林色なき風の吹きゆけり

正規

由利

豪族の作りたる庭秋の声

紀政

入口から直ぐに四季折々の植物が楽しめる路傍植物園が始まる。木々や草花には丁寧な名札が付けられ分かり易く、来場者への配慮が行き届いている。配布された見頃情報にはナンバンギセル、ノハラアザミ、ヌスビトハギ、そしてヒガンバナなど秋の草花の名前がある。広い園内を探しながらの散策は楽しみが増える。また、翅が豹に似た特徴的な模様を持つ蝶のツマダグロヒヨウモンが紹介されており園内各所で飛び回る姿が見うけられた。この蝶は花壇に植えられたスマイレの仲間などを食草とするので、住宅街でも多く見られるとのことであった。

雨傘の雫を受けて萩こぼる

さち子

競ひ合ひ譲り合ふかの秋の草

素山

路傍植物園の絶景ポイントの一つはシイの巨木である。鬱蒼とした雑木林の中でも一段と高く太い幹は王者の風格を持つて見る人を圧倒する、これだけ大きなシイの木は見たことがない。更に進むと物語りの松という老松がある。これは江戸時代松平家の下屋敷の面影を伝えるもので、ひょうたん池とともに回遊式庭園の一部として残っている。武家屋敷にまつわる変遷興亡に思いを馳せ、しばし古の世界に立ち返る。また、池の周りの大木

が最近の台風で無残に倒された、今もそのまま根方を上にして横たわり、何とか早く修復して欲しいと思う。

老松の幹は濡らさじ秋時雨

清秀

台風に倒れた木の根丸く巻く

陽子

彼岸花直立不動に群れてをり

京子

ヒガンバナは秋の彼岸の前後に合わせて開花する不思議な花である。一茎を伸ばし頂端に真紅の花を咲かせて天を突く、すでに草木の根元に散見されていた。また、水生植物園に向かう三叉路にはもみじが色づき始めていた、赤く燃えるような紅葉も良いが初もみじを見つけるのも楽しくまた嬉しいもの、深まる秋への思いが徐々に募る。

紅天狗茸の三叉路花の森

周二

曼珠沙華花も蕾も淋しかりけり

浩一

雨あがり声を限りに秋の蟬

礼子

園の奥まったところに有る森の小道は趣が変わり、ケヤキやミズキの森の下を小川と湿地が続き水鳥の沼から繋がっている。この水源はどこから来るのか、担当の方に聞いたところポンプで地下水を吸い上げ園内を巡回させているとのこと、全体を潤すのはかなりの水量が必要

であろう、その努力と管理の大変さに感心した。

二時間余りの散策を終えて様々な構想を胸に抱きながら作句に入る。句会は目黒駅前のカラオケ店を利用していつものとおり囁目三句出し四句選で行われた。

この自然教育園は五年前の六月新緑の頃、亡き喜仙主宰と共に吟行で訪れている。その時のムクロジの落花が歩道に散り敷かれていたことを思い出す。月日の経つのは早いものだ。

曇天に光をかへす若楓

喜仙

■かさね吟行会■

日時 十一月九日(金)

場所 大本山總持寺

集合 J R 鶴見駅西口改札口

十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（七九）

丸山酔宵子

『もつ二つの全国高校野球大会』

兎に角熱い！海岸近くの茅ヶ崎球場とは言え、真上から注ぐ夏の太陽は強烈である。我が母校の全国軟式野球大会関東大会決勝は、硬式でも第100回甲子園大会に出場した慶応高校との対戦で、ここで勝てば、残念ながら甲子園ではない明石・姫路球場での全国大会出場である。

我が母校栄光学園は戦後横須賀に創立されたカソリック・イエズス会の中高一貫校。戦後の荒廃しきった横須賀田浦の魚雷学校跡地を、イエズス会が米軍から譲り受けたのである。初代校長はグスタフ・フォスという頑強なドイツ人神父で、よく校長室に呼び出されお説教とお尻にお仕置きをされたものである。広い敷地内には外人宣教師の為の日本語学校も併設されていて、ドイツをは

じめアメリカ、ブラジル、ハンガリー、アイルランド、フランスなど世界各国からの神父が英語だけではなく物理や数学の教鞭をとっていた。スポーツも盛んで、ヨーロッパの神父の指導するサッカーでは全国大会にも出場したこともある。

我が野球部も関東では強豪として鳴らし、現役当時神奈川県でも2年連続優勝した実績もある。しかし残念ながら軟式で、硬式への変更を何度か学校に申し入れたが、グラウンド、費用、指導者そして一番の問題は練習時間の問題でいつでも却下され、現在でも硬式ではなく軟式なのだ。

しかし、軟式とは言え、我が母校の伝統はつづいていて、因みに10年ほど前には、生まれながら左手の不自由な和製アボット加藤善之投手の活躍で、全国大会に出場したことがある。加藤君は神宮で野球がしたいと一浪して東大に進学し活躍した。

今年、埼玉代表花咲徳栄との準決勝を、7回コールドで退け、いよいよ今日の慶応高校との決勝なのであ

る。因みに花咲徳栄は昨年硬式甲子園全国大会優勝校である。サザンオールスターズの地元茅ヶ崎球場グラウンドはローカル球場ではあるが、流石にグラウンド状況は素晴らしい。7分間の守備練習も硬式と変わらずきびきびしていて、我我の頃のもたもた感と雲泥の差。序盤は栄光ペースで4対2とリードして8回を迎え、慶応4番の右中間を破る会心の3塁打で同点とされ、いよいよ9回裏、4球の走者が2盗。我が肩のいいスラッガー多田捕手の投球が走者にあたり、ボールが転々とした間に本塁で間一髪セーフ。

アー惜しい、悔しい・・・、これで年金老人の熱い夏が終わったのであります。しかし、横浜での同期との残念ビールの美味しいこと、美味しいこと・・・。

負けてなほ旨さ格別ジョッキかな

酔宵子

「江上浩二の独り言」 II 江上浩二

オリンピック前の北京 ②

ホテルの朝食バイキングでも、人減らしのためのバイキングではなく、食事のスタイルが各自好みのものを選ぶバイキングで、人はあちこちにいる。若いがマネジャーレベルの英語が話せる人、給仕をする人、別々にいる。ドアボーイ役も若い男性と、マネジャークラスの仕切り役の別な人もいる。マネジャークラスの人に荷物をちよつと預けておいたが、奥から取ってきてくれたボーイさんは、チップを上げたら受け取ってくれた。マネジャークラスの方は受け取らないという。

空港の検査でも、多くの人が働いていた。×線の透視像を細かく見て、きちんと一つ一つ何んであるかチェックしていた。狭いところで、検査ゲートの入り口、出口、透視映像チェック係、荷物手渡し係、それぞれ細分化されて一人一人配置されている。何か機械を導入して、自動化する投資金額より、安い人件費でスムーズに動く仕組みを運営している。単純作業者の月給は安いという。折角人がいるのだから、人が仕事する、動く仕組みで十分なのかもしれない。スーパーや店舗でもレジで支払え

ば済むはずであるが、商品が並べてあるところにも人がいる。その店員は紙にいくらいくらと金額を書くだけで、現金は受け取らない。レジの現金取扱いを許された人だけが現金を受け取る。

3章・社会と産業

北京を訪問して、海亀という言葉を教えてもらった。浦島太郎ではないですが、中国人で海外へ出て行き高等教育を受け、それなりの実績を持った人たちが、最近（以前もありました）中国へ戻ってきた人たちをこう呼んでいるそうです。

何が違うか、新生市場経済社会を早急に構築するために、高等教育や産業で活躍できること、新しい会社を起業できる人材に政府は優遇施策をしているのです。

海亀の人が起業すると、会社設立寺の手続支援、税金も免除とか。もちろん、大学院の修士課程以上を修了した人の子供は一人っ子である必要もないとか。30歳台で急速に事業を伸ばした社長さんも多く、国内では有名になつていそうです。

そもそも、なぜ意欲のある人が一度中国を捨てて海外に出て行ったかという理由を考えれば、納得行くと思います。文化大革命が続く中、学生が農村へ行かされ、1960年代の前半では中国国内で鉄鋼産業を興そう

と、熱原料になる木々を農村、山から切り出してしまい、禿山になり、今で言う砂漠化の根源もその時に造ってしまったとの話も聞きました。当時にチャンスがあつて海外へ出られる人は少なかったと思いますが、一部の人は帰国し今の新生社会の基を作ったそうです。

また、天安門事件の後に自国に嫌気をさして海外に出られた方も多いと聞きました。年齢層は当時学生ではなく、学生より年齢が少し上の知識層で今、50歳代の後半、日本の団塊の世代より少し若い層だと思えます。現在は30-40歳代の若手経営者を指導しているそうだと思います。欧米での国際経験が豊かですから、日本国内に留まっている優秀といわれる経営者と比べたら、問題ないくらい厳しさも経験し、実績を上げていると思います。そういったところに、日本企業が中国内でないがしろにされ、彼らの交流相手、欧州の企業、米国の企業がおそらく人脈とともに優遇されていると推察されます。

さて、北京市内の建築が進んでいる高層住宅マンションの話になりますが、もともとは古い住宅地であったところが強制退去でスペースを確保して、高速道路沿いの便利なところ、郊外とあちこちで見ましたし、実際に住居でなく、企業の事務所として利用している方も多く、そのようなマンションへも立ち入れる経験もしました。

建物は、地震がないせいかな簡単に作られているように

す。所謂セメントを流し込んだようなもので、柱、床を木枠で作り固めたままのようなものです。ビジネスビルも似たような作り方をしていました。ビジネス中心街で、鉄骨の枠組みにパネルをはめている工法も見かけましたが、極めて少なかったです。

集合住宅用ですと、例えば日本にいる3LDKくらいの住居が上手く長方形に納まるようにして1フロアにそれぞれ東南西北へそれぞれ面したように配置され、北京は寒いせいかオーブンタイプのベランダは無く、全てガラス張りのサンルームみたいな部屋が外に面しているところに位置されています。外から見るとそのサンルームだけが突き出で、断面が正方形で縦長の柱状のマンションが大通りからあちこちに見えていました。マンションの値段（中国では土地の所有が許されておらず、70年の長期賃借権みたいものを手に入れることになる）は平米（m²）単位で売られ、数千円から高いものだと2-3万円。計算してみてください。90平米で、15円×20000×90=2700万円。中国でこの金額のマンションを買えるのはごく一部の方でしょう。しかし、若い経営者がマンションの一角を購入し（賃貸ではありません）事業を立ち上げている人にもお会いしました。人伝の話ですが、上海のビジネス街では5万円もするところがあるようです。

楽しい時間 72

山本紀久雄

2018年9月30日

神にならなかつた鉄舟・・・その二

筆者の手許に、亡父50回忌法要を営んだ際の集合写真がある。家族・親戚・縁者が40名以上集まって盛大であったことをおぼえている。これが平成9年（1997）の時であるが、以後、既に21年経過しているが、亡父の法要はなされていない。

一般的にこのような事例が多いようである。亡くなった父や母など親族を追悼する法要は33回忌や50回忌あたりで終り、その後は「先祖代々の霊」として集合霊化される。

そうなる背景としては、通常の死者は大きな権力を持たず、または特別な大事件で亡くなるわけでないから、死者の死を哀しみ追悼するのは、家族や親戚・友人たちになる。葬式を執り行い、埋葬し、墓をつくり、以後、家族による墓参りと、自宅の仏壇前で手を合わせる毎日が続く。

50回忌に集まった人々も年齢を重ね、次第に亡くなっていくので、追悼の想いや記憶は風化し、死者は最後には忘れ去られることになる。記憶の切れ目が縁の切れ目になって、それが33回忌や50回忌あたりで法要が営まれなくなる理由であろう。

社会学者の副田義也氏が、弔辞を考察した『死者に語る』（ちくま新書）で、次のように述べている。（参照『神になつた人々』小松和彦著）

《死者は死ぬことによって、その肉体も意識も亡んだ。かれの本質は不在である。しかし、かれを知る人びとが生きているかぎり、かれらはかれの記憶をもちつづけることができる。死者は生者の記憶のなかに存在しつづけるのである。現代のわれわれが死者の記憶とみているものは、古代・中世の人びとにとつての死者の靈魂に限りなく近いのではないか。ここから、生きている人間が死者にしてやれるもつとも大切なことは、死んだ人間をおぼえてやることだという考えかたがでてくる》

同様なことを、民俗学者で国際日本文化研究センター所長の小松和彦氏が『神になつた人々』（光文社知恵の森文庫）のなかで述べている。

《『死者のたましい』とは『死者についての記憶』と置き換え可能なものではないか。つまり『死者についての記憶』の限界が『死者のたましい』の限界ではないか・・・慰霊とは『死者のたましい』を慰める行為であるが、それは同時に『死者についての記憶』を風化させないようにするための方法でもある。したがって、『死者についての記憶』がある限り、『死者のたましい』も存続するであろう。しかし、『死者についての記憶』が薄れていけば『死者のたましい』も消滅していく。つまり、『記憶』の限界が、『たましい』の限界でもあるわけである》

その通りである。記憶は時間とともに風化する。戦争や大災害を体験した人々は、その苦しさや悲惨さを記憶しているが、その記憶を後世に伝えるためには、そのために何かの装置が必要となり、それが特別な墓や慰霊碑とかが築かれるようになった理由であろう。

平成30年(2018)7月14日、戊辰戦争殉難者の「合同慰霊祭」が「白河戊辰150年記念事業」として福島県白河市で開催され、筆者もこれに参加した。実行委員会の人見光太郎会長がパンフレットで開催趣旨を述べている。

《この白河の地は古来奥州への関門として重要視されてきました。それ故戊辰戦争では白河を巡って100日にも及ぶ大攻防戦があり、一戦場では他に類を見ない両軍合わせて1000名を超す戦死者が出た、一大決戦の地でした。白河での戦いはその後の奥羽越の戦争の帰趨を決したともいわれております。

私達の先祖は、死者は全て仏様に成るとの強い信仰心と、また、打ち捨ててはできないとの深い同情心から、東西両軍の別なく手厚く埋葬し、今日まで供養を続けてまいりました。現在市内には60カ所を超す墓や慰霊碑がございます。

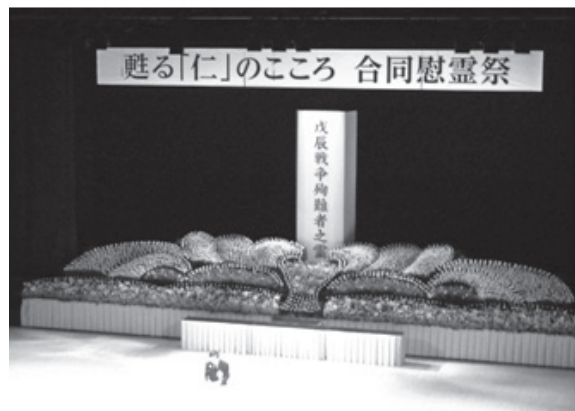
我が国近代化のための尊い礎となった両軍兵士や殉難者の御魂に心から哀悼の誠をささげるに、この地ほど相応しい場所はないとの強い思いから、本日の合同慰霊祭を企画実施するに至りました》

この日は安倍首相からもビデオメッセージが届き「白河の地から近代日本を形づくる『一体感』と『融和の精神』が育まれ、全国に広まった」と、東西両軍を弔った白河の先人を称え、福島県知事、白河市長、萩市長、国会議員等の挨拶もあった。

《柳田國男は『人を神に祀る風習』という論文で指摘している。「死者を神として祀る慣行は、確かに今より昔の方が盛んであった。しかしそれと同時に、今ではもう顧みない一種の制限が、つい近い頃までは全国的に認められて居た。支那で祠堂

と謳ひ我々が御霊屋と名づけた一家専属の私廟は別として、弘く公共の祭を享け、祈願を聴容した社の神々の、人を祀るものと信ぜられる場合には、以前には特に幾つかの条件があった。即ち年老いて自然の終りを遂げた人は、先ず第一に之にあづからなかつた。遺念余執といふものが、死後に於いてもなほ想像せられ、従つて屡々タタリと称する方式を以て、怒や喜の強い情を表示し得た人が、このあらたかな神として祀られることになるのであつた》

この中で遺念余執という意味は、遺念が「亡霊」のことであり、余執とは「心に残つて離れ去ることがない執着」と理解される。白河の「合同慰霊祭」は正に、戊辰戦争の白河激戦の記憶を後世に伝えるために、東西両軍の戦死者を「神」と崇め奉る儀式だったのである。



絹の話 (96)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

天蚕と他の野蚕の違い

野蚕絹の範疇に入る物は絹糸昆虫の吐糸する絹糸のみならず地球上の比較的小さな生物が身を守るシエルターの様な袋や紐は殆ど絹です。蜘蛛の糸、蜂の巣、貝の紐や岩への接着質等数えれば10万種類を以上あると言われていますが誰も数えた人はいません。

それぞれの生物が作る絹の多くが卵や幼虫を保護する為進化の途中で、それぞれの目的に応じたアミノ酸(蛋白質)構成を作り上げ、保温、保湿、抗湿、抗菌、防紫外線、緩衝性(伸縮性)などの機能性を発揮するように作られて来ました。

天蚕と柞蚕、タサール蚕はそれぞれどう違う

生糸価格と生産量の比較

天蚕…日本産…70万円/kg 前後	0.006t (6kg)
…中国産…20万円/kg 前後	不明
柞蚕…中国産…1万円/kg 前後	5万t前後(推定)

タサール蚕…インド産…1万円/kg 2.5万t前後(推定)
参考…家蚕…日本産…1万円/kg 前後 15t

…ムガ蚕…インド産…5万円 前後 5000t (推定)

…エリ蚕…ベナム他…7千円/kg 前後 4000t (推定)

天蚕、柞蚕、タサール蚕は近似種なので、織度、艶、機能性等非常に良く似ています。

柞蚕とタサール蚕は糸色も価格も似ているので、中印国境を越えて(インドが柞蚕を輸入)織物のコラボレイションが盛んです。

天蚕は上記に見られるように価格が非常に高価です。それは繭がグリーンで糸の僅かな緑が珍重されて生産量が少ないので高い付加価値が付けられています。

この価格は和服世界が支えている日本特有な現象です。世界的に高付加価値が認知されている繭はムガ蚕です。エリ蚕は短い繊維しか採れないので、以前は日本の絹屋間では絹の仲間から外されていましたが、安くてカシミヤのように柔らかいので、需要が高まって来ました。

糸質の差異

共通の特徴…多孔質(孔の数はどれもほぼ同じ)
織度(糸の太さ)…3種とも6デニール前後でよく似ていますが、タサールさんは90種類以上あり太い物では12デ

ニール位の野趣に富んだ物もあります。

参考…家蚕は3デニール（細織度、太織度様々有り）。

…1デニールとは9000mの糸が1g。

糸色…天蚕…薄緑 柞蚕…薄茶 タサール蚕…灰薄茶
艶…種とも近似

3種の野蚕絹はどれもシャンパンゴールドに輝く高貴な艶が人を魅了してやまないのですが、以外に販売者がその事を強調していません。
摩擦堅牢度…3種とも近似

機能性の差異

3種とも保温性、放温製、保湿性、放湿性、抗菌性、防紫外線製等はほぼ同じと思われれます。

一般日本人の3種野蚕の認知度（女性）

天蚕を知る人は、親から着物を貰った時教えられた。皇室の養蚕所のテレビを見て知った。呉服屋で薦められたなど数%。

柞蚕は柞蚕という野蚕の絹という認識はないが、繭紬という名前で高齢者に知られているが0.1%程度。タサール蚕はインドシルクという通称名で数%。

殆どの人は家畜化された繭から採れる家蚕の糸を絹と

認識しているが、絹に野蚕の物も有るとは認識していない。

今後の課題

野蚕絹は天蚕の薄緑の色ばかり強調されていますが、家蚕絹に勝る機能性を強調して、野蚕シルクはエコで健康素材である事をセールスポイントにすべきでしょう。

生糸を採った残糸（繭からは75%が絹紡糸）は価格も安く（生糸の1/5）機能性が高いので、下着、シート、毛布、パジャマ、靴下など日常生活の必需品作ってゆく必要を感じます。

それは災害時には低体温防止素材である事は勿論、衝撃緩和、化膿止めにもなり、気持ち落ち着かせる一種のマルチ防災用品でもあります。

一方、もう一つの特徴としてどんな絹にも勝る艶の美しさをもっと強調して付加価値を高めてゆくべきでしょう。

野蚕絹の販売を促進する事は環境を守る事にもなりますので、野蚕と環境の関係を強調してゆかねばなりません。とは言っても日本で採れる野蚕は極少量ですので、繭をつくる人、糸を加工する人、染織の人など国際分業をして行く事が野蚕絹の振興に欠かせないものと思います。

3種の野蚕絹は脱色したり染織したら、3種を区別出来る人がいるでしょうか。

漢詩研修 (二十五) 千代田岳精会 平井茂行

詠史

東辺拓地三千里
曾効荷蘭設学科
吾邦空説英雄跡
百歳無人似伯多

詠史

東辺地を拓く三千里
曾て荷蘭に効つて学科を設く
吾が邦空しく説く英雄の跡
百歳人の伯多に似たる無し

学科 学校。ここではロシアのピョートル大帝が創設した砲兵学校、或いは帝国サンクトペテルブルク科学アカデミーなどを指すのであろう。
百歳 百年。
伯多 ピョートル大帝(補説を参照)。

佐久間象山

【作者】

佐久間象山さくま けんざん

一八一二～一八六四 信濃松代藩士。

名は啓ひびき・大星たいせい、字は子迪しでき・子明しめい。象山と号した。佐藤

一齋いっさいの門に入つて朱子学を学び、また蘭学・砲術を修めた。早くから開国論を唱え、西洋の科学技術の導入

を主張、江戸の私塾象山書院や深川ふかがわの松代藩邸で教え、勝海舟かつかいしゅう・吉田松陰・橋本左内さかもとさやうま・坂本龍馬さかもとりゅうまらが学んでいる。

彼自身、地震計や電気医療器を製作し、洋服も着用したと伝えられるが、幕府・朝廷に再三、開国策を説いたため攘夷派にくまれ、京都で暗殺された。『象山先生詩鈔』『荷蘭語彙』などがある。

嘉永三年（一八五〇）十二月、四十歳の作。江戸から松代に帰る途次、ロシアのピョートル大帝を詠んだ詠史詩である。

ピョートル大帝（ピョートル一世、一六七二～一七二五）は、一六八二年にロシア皇帝に即位。一六九七年から一年半ほど西欧に派遣した使節団のなかに、自身も偽名を使って紛れ込み、アムステルダム（オランダ）では自ら船大工として働いて造船技術を習得するなど、西欧文明の摂取に努めた。新首都ペテルブルグを建設し、バルト海沿岸・カスピ海沿岸に領土を拡張。国内では西欧技術の普及、産業の振興に努め、ロシアを東方の辺境国から脱皮させた。

本誌の前半は、ピョートル大帝の事跡を、東方では広大な土地を開拓し、オランダで学び、学校を創立したとまとめる。

後半では、〴〵ところがわが国は英雄の事跡を論じるだけで、この百年、ピョートル大帝のような人は誰もいないと述べてゆく。ピョートル大帝が大功を立てた基礎が西洋の学術にあったことを詠じ、日本もそうあるべしと主張した作品である。

『俳聖』松尾芭蕉と唐・宋の詩人たち

中屋保之

芭蕉は禪に影響を受け、禪と関連の深い俳人であると言われている。三七歳の時、仏頂に出会った。芭蕉の参禪の師に当たる禅僧である。

『鹿島紀行』の旅で仏頂を訪ね、『奥の細道』でもその昔の住居を訪れ、書簡も交わしていたことから、芭蕉に深い影響を与えたことが想像できる。

一方で、芭蕉四十歳前後のころ、談林派を脱し独自の俳境を目指し、老荘思想や、杜甫、蘇東坡、黄山谷、白楽天、寒山などの漢詩風に関心を寄せ始める。作風も晦澁奇矯な句風に転換しだした。延宝八（一六八〇）年冬、芭蕉は、市井雑踏の地を離れ、深川六間堀に移り住む。門下から一株の芭蕉を贈られ「芭蕉庵」とし、芭蕉翁と尊称されしは「はせを」と自書した。漢詩調は次第に格調の高さを増し、其角撰の『虚栗（みなしくり）』で頂点に達する。「芭蕉野分して盪に雨を聞く夜かな」「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」「世にふるはさらば宗祇のやどり哉」など、延宝末から天和にかけて、徐々に純化の度は深まってゆく。（山本健吉）

宝井其角による蕉風確立に至る過渡期の撰集である「虚栗（みなしくり）」の跋文（ばつぶん＝あとがき）や、「田舎之句合」の序でその傾向を読み取ることができる。

「虚栗」跋文

栗と呼ぶ一書、其味四あり。李杜が心酒を嘗めて、寒山が法粥を啜る。これに仍つて、其句、見るに遙かにして、聞くに遠し。侘と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をつつねて、人の拾はぬ蝕栗也。恋の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄金鑄小紫、上陽人の閨の中には、衣桁に薦のかゝるまで也。下の品には、眉ごもり親ぞひ娘、娶姑のたけき争ひをあつかふ。寺の児、歌舞の若衆の情をも捨てず、白氏が歌を仮名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其語震動、虚実をわかつたず、宝の鼎に句を煉つて、龍の泉に文字を治ふ。是必ず他のたからにあらざ、汝が宝にして後の盗人を待て。

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

「田舎之句合」序

桃翁栩栩齊におまして、為に俳諧無尽経をとく、東坡が風情、杜子が洒落、山谷が景色より初て、其体幽になだらかなり、練馬の山の花のもと、渭北の春の霞を思ひ、葛西の浦の月の前、再江東の雲を見ると、螺子此語にはづんで、農夫と野人とを左右に分ち、詩の体五十句をつつかに、語路の巷のまかり曲れるをもつて、田舎とは名けたるなるべし、仍以これに翁の判を得たり、判詞、莊周が腹中を吞て希逸が弁も口にふたす、遠くきく、大江の千里は百首の詠を詩の題にならひ、近所の其角は俳諧に詩をのべたり、嗚呼千里同腹中なることを知る、知るといへば我是を知るに似たり、知らずして爰に筆をとる、又知らざるなり。

延宝八歳次庚申仲秋日

嵐亭

治助 謹序

芭蕉の書斎の名である「栩斎斎（くくさい）」は『莊子』の「莊子の胡蝶」という寓言から来たといわれる。この序には四人の中国詩人のことふれている。蘇東坡、杜甫、黄山谷に続く四人目の中国詩人はあの有名な李白である。李白の名前は直接出ていないが、「ねりまの山の花のもと、渭北の春の霞を思ひ、葛西の海の月の前、再（ふたたび）江東の雲を見ると」という芭蕉の語に暗示されている。唐の時代の大詩人杜甫の「春日懷李白」という詩に「渭北春天樹、江東日暮雲」の句があつて、渭北は杜甫の居住地、江東は揚子江の東岸、李白の住んでいたところを指している。芭蕉は比喩的な表現で杜甫や李白のことを持ち出した俳諧をつくるとき、常に中国の偉い詩人の詩をおもいだして、劣らないように考案しなければならないと門弟たちに教えていたと思われる。さらに、「桃青」という号は李白のことを念頭に置いてつくったものだとはいわれている。

『蘇新黃奇』—蘇東坡の新味、黄山谷の奇抜—とかいう表現は中国の詩論によく用いられることから、芭蕉あるいは嵐雪はその四人を例にあげたとも考えられる。蕉門の『莊子』にたいする関心および中国詩歌の伝統に対する関心を理解するための一助であらう。

『春夜宴桃李園序』（冒頭部分）李白
夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。
而浮生若夢、為歡幾何。

而して浮生は夢のごとし、歡を為すこと幾何ぞ。
夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。

奥の細道（冒頭部分）松尾芭蕉
月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。船の上にな生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖（すみか）とす。古人も多く旅に死せるあり。

『春望』（冒頭部分）杜甫
国破山河在
城春草木深

杜甫
国破れて山河在り
城春にして草木深し

奥の細道（平泉の一説）

さて、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。『国破れて山河あり、城春にして草青みたり』と、笠うち敷きて、夏草や 兵どもが 夢の跡

『芭蕉は苦學力行の人で、讀書についても和漢佛の多くの書物を渉獵したものと思はれる。云々』（二枝 忠「芭蕉に影響した漢詩文」より）

第一次ベビーブームの私たちは中学生の時、間違ひなく「月日は百代の過客にして…」を暗唱させられたはずである。残念なこと、その詩的背景、ましてや李白、杜甫、蘇東坡などといった唐・宋の詩人たちとの関連など思いもせず、当時から不勉強さを恥じ入りばかりである。

（参考文献 二枝 忠「芭蕉に影響した漢詩文」 日本大百科全書等）

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

二人行杼 去過難寸 秋山乎 如何君之 独越武(②)一〇六、大伯皇女)

(口訳) 二人で行っても(何となく物淋しくわびしく)過ぎかねるように思われる秋の山を、どんな気持で君は一人で今頃は越えて居られるであろうか。

前の歌に続いて出ている歌である。「二人行けど」は二人で連れ立って行つてさえもの意。結句は「コエナム」と訓む説もあるが、「コユラム」と訓んで、別れて後、弟の大津皇子がどんなにか淋しい気持で、秋山をとほと越えて行くことだろうか、その姿を伊勢にあつて推し量つている意にとつた方がよい。この作も弟皇子に対する姉としての親愛の情がよく出ているが、茂吉は「この歌にはやはり単純な親愛のみでは解けないものが底にひそんであるやうに感ぜられる」と注意している。前述した史実などを考え合わせると、既にこの時弟皇子の謀反発覚の事も察知されていて、その肉身に対する御心痛がこの作の中には下ごもつていのように思われるのである。

人言を繁みこちたみおのが世にいまだ渡らぬ朝川渡る

人事乎 繁美許知痛美 己世爾 未渡 朝川渡(②)一一六、但島皇女)

(口訳) 世間の人が口にする噂があれこれとひどく、うるさいので、私は生れてからまだ渡つたことのない。未明の川を渡つてあなたの所へ行くことです。

但島皇女が高市皇子の宮に居られた時に、かねてお慕いしていた穗積皇子にひそかに接せられて、その事があらわれた時に作られた歌。御二人はいずれも天武天皇の御子様で異母兄妹であつた。「こちたみ」は「言痛み」で「うるさいので」の意。「朝川渡る」は皇女が皇子に逢うために、自分の生涯で始めて、こんな早朝の冷い川瀬を渡ることであるという意で、女性の方から男性の許へ通うことも当時としては珍らしい事になるが、何よりもこの句は皇女自身の現実の体験から生れているところが貴重で、自らそこに清新な感慨がほとばしり出ると同時に、この歌に人に迫る力を持たしめているのである。三句以下、まことに心憎い表現である。その生々しい実感は、今日の吾々男性の心をも牽くに十分である。

「歴代天皇御製歌」(九十四)

賈名海屋資料館

「昭和天皇」④

(昭和三十年・一九五五年・五十五歳)

相撲

○ひさしくも見ざりし相撲ひとびとと手をたたきつつ見るがたのしき

をりにふれて

○なりはひに春はきにけりさきにはふ花になりゆく世こそ待たるれ

(昭和三十一年・一九五六年・五十六歳)

日ソ国交回復。国連に加盟

○水清きいささ小川の流れゆくたたら庭の春のしづけさ

神嘗祭に皇居の稲穂を伊勢神宮に奉りて

○八束穂を内外の宮にささげもてはるかに祈る朝すがすがし

○我が庭の初穂ささげて來む年の田の實いのりつ五十鈴の宮に

(昭和三十二年・一九五七年・五十七歳)

甲府、春風寮にて

○よるべなき老嫗の身にもあたたかき春風かよふ家のあれかし

(昭和三十三年・一九五八年・五十八歳)

植樹行事に際して

○美しく森を守らばこの國のまがもさけえむ代々をかせねて(まがⅡ災難)

(昭和三十四年・一九五九年・五十九歳)

靖國神社の九十年祭

○ここのそぢへたる宮居の神々の國にささげしいさをぞ思ふ

皇太子の結婚(四月十日)美智子妃殿下と御結婚

○あなうれし神のみ前に日の御子のいもせの契り結ぶこの朝

○日の御子の契り祝ひて人々のよろこぶさまをテレビにて見る

愛知・三重・岐阜の風水害・伊勢湾台風。

○日の御子をさしつかはして水のまがになやむ人らをなくさめむとす

○たちなほり早くとぞ思ふ水のまがを三つの縣の司に聞きて

千鳥ヶ淵戦没者墓苑

○ 國のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

(昭和三十五年・一九六〇年・六十歳)

日米信安保条約成立

光

○ さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさむぞ我がねがひなる

初めての皇孫・浩宮御誕生

○ 山百合の花咲く庭にいとし子を車にのせてその母はゆく

九州への空の旅

○ 白雲のたなびきわたる大空に雪をいたたく富士の嶺みゆ

○ 地圖を見るごとき海山しづしづと翼の下をさかりゆきつつ

九州への旅

○ 霞立つ春の空にはめづらしと雪の残れる富士の山見つ

雲仙・薊谷あざみにて

○あいらしきはるとらのをほ咲きにはふ春ふかみたる山峽ゆけば
○藤色のやまるとりさうは山峽そはぢの阻路そはぢに群れていま咲きさかる

小河内ダム

○水涸れせる小河内のダム水底にひとむら擧げて沈みしものを

那智の滝

○そのかみに熊野灘よりあふぎみし那智の大瀧今日近く見つ

日本遺族會創立十五周年

○年あまたへにけるけふものこされしうからおもへばむねせまりくる

(うから||親族)

日本傷痍軍人会創立十周年記念全国大会

○國守ふと身をきざづけしひとびとの上をし思ふ朝に夕に

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2018年10月3日

喉の痒み

いつものまにか蟬の音が無くなりました

鼻水

などの症状が出て来ます

台風や風が強い日は

この時期は庭の手入れをする

遠くからアレルギー反応が出る物資が

ご家庭も多く

風に乗って飛んできます

手入れをしている方も

そつすると

周辺の方も症状が出やすくなります

風邪ではないのに

この時期になると

咽る単発の咳

これらも含め風邪も流行りだします

歯や歯茎の痛み

そろそろマスクの時期が

皮膚の問題

近づいてきましたね

身体の怠さ

2018年10月5日

贅沢な感覚

歩いていると

金木犀の匂いがしてきました

好き嫌いのある匂いですが

この匂いを香ると

秋の始まりを感じます

前回書いた

蝉の鳴き声や

植物の色や変化

雲の形や大きさ

朝の空気感

風の温度や湿度

自然から季節の移り変わりを感ずるのは

当たり前になってしまいましたが

様々な表情や感覚を

見せて感じさせてくれる

何とも贅沢でありがたく

素敵な時間ですよね

季節や時間の移ろいを

身体で心で楽しみたいと思います

御津磯夫短歌鑑賞 II

「月虹」 鮫島 満

龍舌蘭のひこ生えを植う花立つはわが生れ替りてまた老
ゆる頃 『かうしんばら』 昭和五十六年

私の育った家の庭に龍舌蘭があり、小学生の頃に十メートルほどの花茎を伸ばし豪華な花を咲かせた。父も近所の人たちも、これは六十年目に咲くと話していた。さらに長じて勤めていた職場の庭にも龍舌蘭があり、あるとき、子供のころに見上げたのと同じように花が咲いた。この花についてもいろいろな人が六十年目に咲くと言った。もちろん私もそう言った。

さて、右の歌、龍舌蘭の芽を植えながら作者は、これに花が咲くのは自分が生まれ替わってもう一度老いる頃だと言っている。結句で「わが生れ替りてまた老ゆる頃」と言うのだから作者も龍舌蘭は六十年目に咲くという説を信じていることがわかる。

この項を書きながら私は『広辞苑』を開いてみた。するとそこには十〜二十年目に咲くと書いてあった。ではと開いた『ブリタニカ国際大百科事典』はその年数は書いていない。私はここに六十年説を信じている人への忖度をありがたく感じた。では、『牧野新日本植物図鑑』はどうか。ここには「数十年を経たものは、高さ6〜9mに達する円柱茎を葉の間に出し、枝を分かち多数の黄色の花をさかせる」「俗にCentury plant（百年植物）というが、百年目にはじめて開化するというのはあたつていない」と書かれている。ここで百年説があることを知ったのは収穫だったが、何も調べずに六十年説を信じたままではいかなかった。

物知りの御津磯夫がたとえ百年説を知っていたとしても六十年説を支持してことは掲出歌の下句に、「生れ替りてまた老ゆる頃」とあること、つまり、「生れ替りてまた死ぬる頃」ではないことでわかる。この歌で「花立つは」というのは、全ての花について言える表現ではなく、長年鍛えた写生眼から生まれたものである。

「氷魚」のことから (214) 岡本八千代

明日は子規の糸瓜忌(九月十九日)。子規は短歌・俳句・詩も創作していた。私の「イーはとぶノート」に中日新聞(2017年11月6日付)に「子規の子守歌忘れないで」が貼ってあった。

△子規の子守歌。

ねんねんやをころりや。

ねんねの坊やは誰が子ぞや。

お城の上の星の子か。

南の海の河豚の子か。

坊やを産んだ母の子ぞ、

坊やを抱いた母の子ぞ。

この子守歌を広く知ってもらおうと、松山市の団体「松山子規会」のメンバーの方たちが、生誕百五十年を記念して地元にも詩碑を設置されたものだった。

この子規会によると、子規は1897年の文芸誌「日本人」に六編の新体詩を発表。いずれも松山について書かれており、その一編目が子守歌であったという。

また子規は、六編の詩の前文に、

「最近は小学校教育が行き届きすぎて子守歌が歌われなくなっている。合唱歌より文学的だと思うので、忘れるのが残念だ」

との趣旨を書き残してもいたそうだ。子規会の田中安子さんという人は、「子守歌や里歌は、その土地への愛情が表れている。子育や町おこしのきっかけになれば」と話しておられ

たということだ。

この子守歌の詩碑は、直径約一・五米の円形で、詩の内容にちなみ、観光客も多く訪れる松山城ロープウェイの駅舎ホールに去年九月に設置されたのであった。詩碑の横には、田中安子さんの作曲した子守歌の楽譜の碑も置かれているという。

私は、子規の松山へこの靴履いてと買った靴も今はわしわに汚れてしまい、せつかくのチョコレート色の皮も何色かわからないようになってしまった。——それでもまだ、生きているかぎり、子規のこと、何かを書き続けてゆく夢を持っている気がしている。松山は私の永遠の憧れのところかもしれない。

ここに至って私は、正岡子規の絵と詩のを感じてやまない。痛ましい病気の子規は、その内面から、目にする小さな花をも愛おしむ心が動いている。彼は、その心が絵にも詩にも湧いてくるらしい。何ともいえない感情の哀しさ美しさ

が湧いてくるのかも。

いたつきの

癒揺る日知らに

さ庭べに

秋草花の

種を蒔かしむ

枕べに

友なき時は

鉢植の

梅に向ひて

ひとり伏し居り

(歌考へつつ居り)

「ひとり伏し居り」は、子規が創作に送っているらしい歌。右のように書かれて発表したところを見ると短歌も詩だなあと思う私。

編集室だより【二〇一八年九月】

今泉 由利

○外国生まれ、外国育ちの私の子達が日本に来た時には、日本での良い思い出を増やしてあげたい。

東京都美術館の「読売書法展」に、野崎公子さんの書をめざして出掛ける。公子さんは、アルゼンチン生まれのまだ幼かった子達の「日本留学中」を、ずっと「書」の指導をして下さった。公子さんの美しい書を見上げ、沢山のことが蘇る。日本に来た褒美になる。

偶然、同じ美術館。「藤田嗣治展」。日本であり、外国であり。ニューヨークにも、アルゼンチンにも、画伯の描かれた場面を思いつつ、何とも不思議なうれしさでした。

○「飛鳥山公園内野外舞台」

飛鳥山薪能・人間国宝二題

「狂言」・二人大名・通りの者・野村万作・大名・高野和憲・大名・野村萬斎

演者の動作、仕種：…に見入っている時、父の形見の、奈良の「刀彫の雛段が動きだした、と感じてしまった。

「能」紅葉狩・野村四郎、森常好…

戸隠山、上臈が数人の侍女を連れて紅葉狩、舞台に絢爛能衣裳が並ぶ、さあ！と思う時、雨が降りはじめた。鬼神退治、酒宴どころではなく、急ぎよ中止。

○国立科学博物館附属・自然教育園。天然記念物及び史跡(港区白金台)へ俳句の吟行。

どうしても逢いたくなくなってしまつて、よくチェックに出掛

けるところ。ウバユリ、ガマの穂、ツリフネソウ、ノハラアザミ、ムクロジ…十一月の表紙にしたヒガンバナは、ここで描いた。

○木喰上人。千体を超える微笑の仏像を残されたお方の和歌に気付いた。

『みな人の、心をまるく まん丸に どこもかしこも まるくまん丸』
この御歌、心にもち続ける。

○俳句仲間の「やまざき れいこ」チャリテイ・シャンソン・コンサート。

とまどっている人達の心のサポートもされ、シャンソン歌手もされ。

ラ・ドンナ・ミュージック・レストランへゆく。原宿、竹下通りを通ろうとしたのだけれど、細いとはいえ、この道中、ぎつしり人々に埋め尽されて、前にも後にも…：どうにもならなかった。いつの間にか、こんなことになってしまった。

○「日本。コロンビア修好110周年記念」。渋谷区文化総合センター大和田にて。

コロンビア大使館よりお招きいただいた。

千年の遺蹟より出土した、鳩型、鸚鵡型、人型…：様々のオカリナと、ピアノのコラポ。

透き通る澄みきった音色に、千年もタイムスリップしてしまった。身も心も清まった。

コロンビアの民族衣装など、織維を求めて行った日があつたなあ…：。

「昔」が、沢山蘇って九月が終り。

野菜・まんだら

(9) アボカド avocado



- 熱帯アメリカ原産。
- クスノキ科 ワニナシ属、常緑高木。
- メキシコ系、中央アメリカ系、西インド諸島系、グアテマラ系、と多種。
- 中南米では、数百年以上にわたり栽培されてきた。
- ペルー・チャン遺跡から、アボカドの実をかたどった土器が出土している。



- 日本への輸入果実は、バナナ、パイナップルの次にアボカドがくる。
- 世界の果実を分析した結果、一番栄養価の高いのは、アボカドだった。ビタミン11種、ミネラル14種、脂肪16%、脂肪の88%はリノール酸など不飽和脂肪酸、ノン・コレステロールであり、いくら食しても太らない。アボカドの木は、年中実を稔らせているから、その昔のマヤ、アステカ、インカ人は「生命の泉」「生命の果実」と常食していた。
- アルゼンチンの中央部、サルタ、フファイ地方を旅した時、どこの家の庭にも、高木常緑のアボカドの木があり、沢山の実がなっているのを見上げる。もちろん、ごちそうになった。
- 今、東京では、マーケットでメキシコ産が多く、売られている。



- ヘタの方から種にそって、ぐるりとナイフを入れ、右左にひねると半分になる。
- 大きな種を取り出したくほみにはちみつを入れ、果肉の味だけ味わったり、はちみつだけを食べたり、まぜて味わったり……私の毎日の朝ごはんです。

今泉由利

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- TEL (〇三) 五九二四・二〇六五
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇会員・今まで会員の方。希望される方。
- ◇会費制 廃止。
- ◇新しく購読を希望される方 一ケ年五千円。
- ◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九
- ◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- ◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。